ひとりぼっちの海はきらいだ

後藤竜二・作／中山正美・画

ひとりぼっちの海はきらいだ

後藤竜二

ひとりぼっちの海はきらいだ

現代・創作児童文学

初版発行／1977年2月©
第10刷発行／1981年1月

著者／後藤竜二

発行所／株式会社 **金の星社**

〒111 東京都台東区小島1丁目4－3
電話／東京03－861－1861（代表）
振替／東京0－64678

印刷／㈲協栄印刷
製本／東京美術紙工

乱丁落丁本は、ご面倒ですが小社営業部宛ご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

913 後藤竜二
ひとりぼっちの海はきらいだ
金の星社 1981
196P 22cm （現代・創作児童文学）

基本カード記載例

8393－042141－1406

はじめに

うそつき、うらぎり、ガリベン、えこひいき、
きらいだけど、
ひとりぼっちの海は、もっときらいだ。

もくじ

1 まぼろしの海へ……6
2 ゴマはすれども高いびき……17
3 どらねこ横町の少女……32
4 海賊たち……46
5 階段の下の花畑……58
6 花と果し状……73
7 天下末年八月吉日……83
8 アイスクリーム・パーティ……97
9 会社からの電話……109

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

10 みまい客たち……119
11 花火……133
12 とうさん、バンザイ！……144
13 ろじうらの子どもたち……160
14 とうさんの演説……172
15 どらねこ横町から出発！……183
あとがき……196

作者・画家紹介

後藤竜二（ごとう　りゅうじ）

1943年，北海道美唄市に生まれる。早稲田大学卒業。1970年，「大地の冬のなかまたち」で第8回野間児童文芸推奨作品賞を受賞。おもな作品に「地平線の五人兄弟」「白赤だすき小○（こまる）の旗風」などがある。

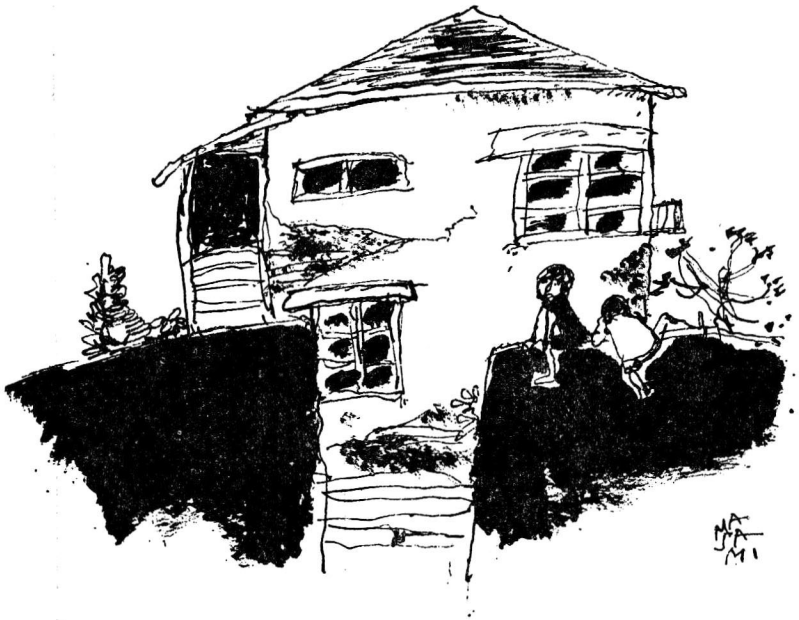
中山正美（なかやま　まさみ）

1914年，宮崎県に生まれる。川端画学校に学び，1950年頃から，おもに児童図書の装幀，挿画を手がける。作品に「大きい1年生と小さな2年生」「ユキはひとりぼっち」「大きな火なわじゅう」などがある。

現代・創作児童文学

ひとりぼっちの海はきらいだ

後藤竜二



1　まぼろしの海へ

夏休みが近づいていた。

柳町小学校・六年1組では、だれもが、おちつきなく、そわそわしていた。夏休みの計画をあれこれと空想して、授業中でも、へいきでおしゃべりをしあっている。

先生にしかられても、へっちゃらだ。

「ゴメーン。」なんて、あまったれた声をだして、すぐにまたおしゃべりだ。

「まじめにやれ！」

担任の竹山先生も、いちおう、おっかない顔をしておこるのだけど、ちっとも、ききめがない。

（ほんきでおこってるんじゃないんだよ）

みんな、ちゃんと知っている。

先生は、もうひと月も前から、サファリのジャケットをひらひらさせて、「夏休みには、アフリカの大草原を、ジープでぶっとばしてくるのだ。」なんて、いっていた。

（先生こそ、いちばん、そわそわしてるんだ）

みんなは、ちゃんと知っているのだ。

だから、へいきで、おしゃべりしてる。

だけど、教室のざわめきのなかで、花井有（ゆう）は、ひとり、ゆううつだ。みんなのおしゃべりが、たまらなくいやだ。

夏休みは、そりゃ楽（たの）しいにきまってる、と有もおもう。

「おまえ、こんな問題もわからないの？　ほんと？　いやあ、どうしようもないな、まあ、立っとれ。」

悪気はないんだろうけど、そんな、竹山先生の悪口雑言（あっこうぞうごん）とも、グーバイできる。それだけでも、天国だ。

（おれだって、さかだちして両足たたいてさ、バンザイの百ぺんも唱（とな）えたいよ）

そうおもう。

しかし、花井有は、ゆううつだ。

夏休み直前のみんなのおしゃべり、——それが、いつの年も、花井有をゆううつにさせる。みんな、まるでべつの人間になったように、かん高い声で、かってなおしゃべりをする、——それが、いやだった。

終業式の日の朝。教室は、みんなのおしゃべりで、わんわんとうなりをあげていた。

おしゃべりの中心には、牧村克彦がいた。

克彦は、新しくできたばかりの八階建てマンションのてっぺんに、住んでいる。背が高くて、成績もよくて、ディスクジョッキーのように人をわらわせるのがうまかったから、とくに女の子には人気があった。

その牧村克彦の夏休みは、ハワイの海ということだった。

「日本にも、白浜なんて地名があちこちにあるけどね、でも、どれもインチキ。誇大広告。ひどいもんだね。」

克彦は、ほがらかにしゃべる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「その点、ハワイの白浜は真実の白浜。ホワイトビーチ。それで、海は目のさめるようなブルー。ブルーの海を背景に、かっ色のはだのカワイコちゃんたちが、フラダンス。」

やおら立ちあがって、まねをする。ヤだァ、とみんながわらう。

「しかし、ぼくは、そんなのには、まったく興味がない。水上スキー、すなわち、これだね。」

長髪を、きどってゆっくりと、かきあげた。

「よくゆうよ。」

「調子にのっちゃってェ。」

みんなは口ぐちにいいながら、でも、けっこううらやましそうに、

「いついくんだよ。」

「もうビザは取ったの？」

「おせんべつ、あげよか？」

そんなことを、いっている。

じっと坐っていても、シャツが汗でぬれるほど暑いのに、肩を組んだり、せなかをたたきあったりして、わらってる。

（いいかげんにしろよな、まったく）

花井有は、克彦の席からすこしはなれたところで、小島九郎とならんで、マンガの本を読んでいた。九郎のマンガの本だ。九郎はマンガ家になろうとしている。いつも、左右のしりポケットに一冊ずつ、マンガの文庫本をおしこんでいる。そのマンガ本を借りて、有は読んでいるようなふりをしていた。耳は、みんなの話を、聞いている。

「わたしはね、北海道。」

と、やがて、高いすんだ声が聞こえてきた。

「おじさまが、大きな牧場を持ってらっしゃるの。牛が二百頭もいるんですってよ。ひろびろとした牧場に立つと、オホーツクの海が見えて、霧笛が、風にのって聞こえてきたりするんですって。」

話しているのは、たしかに、三輪房子だった。副学級委員で、1組だけでなく、ほかの組の男子にも、ひどく人気があった。

（フーちゃんまで、そんなじまん話するのか……）

花井有は、房子が好きだった。フーちゃんと、自分だけのニックネームを考えたりしていた。だから、気が気ではなかった。マンガ本から顔をあげて、三輪房子の横顔をうかがった。

房子は、いつもポニーテール（後頭部でたばねてたらした髪型）だ。髪をたばねるかざりだけ、毎日のように代えてくる。その日は、すずらんの髪かざりだった。白い顔が上気して、すきとおるようなうすもも色だ

った。
「あ、いいなあ。ぼく、おっさんたちとの旅行なんかやめて、いっしょにくっついてっちゃおかナ。」
克彦がおどけて、房子が、ぶつまねをした。みんながわらい、房子がわらい、花井有はどうしようもなくゆううつになった。
(ちぇっ、成金野郎！)
有は克彦の横顔をにらみつけて、パタンとマンガ本をとじた。どこか、みんなのおしゃべりの聞こえないところを、あるいてこようとおもった。立ちあがろうとしたら、
「あ、有君は？」
と、房子が、きゅうにふりむいた。
目があったしゅんかん、房子は、あわてたように、ぱちぱちっといそがしくまばたきした。
(ああ、やっぱり、フーちゃんは克彦につられて、あんなことといってしまったんだ)
有は、房子のあわてたようなようすをみて、すこしほっとした。
(だけど、このおれに、なんてこときくんだよ！)
みんなが、へんにシンと静かになって、じっと花井有をみつめている。小島九郎も、吉岡健二

も、間洋平も、白瀬朝子まで――どらねこ横町のみんなが、みつめている。花井有はこまってしまった。

「ねぇ、どこにいくの?」

有がすぐにこたえないものだから、三輪房子は、失礼ね、というような表情を、ちらっとみせた。

「おれは、三陸の海さ。」

花井有は、とっさに、そういった。どうにでもなれという、やけっぱちなきもちだった。房子と克彦と、そしてふたりを取りまいているみんなをにらみつけるようにして、花井有は、きっぱりと、うそをついた。

うそだけど、うそじゃない。

有は、空想の世界で、なんども三陸の海に行った。

三陸の海は、とうさんのふるさとだ。

「いいとこだぞ。ほんとうにいいとこなんだ。」

よっぱらったりすると、とうさんは、遠くをみるような目になって、いうことがあった。

「三陸の海、三陸の人だ。――いつか、きっと、連れてってやるからな。」

だけど、とうさんの「いつか」は、いつまで待っても、やってこない。『おんぼろアパート脱

出作戦』のせいだった。かあさんが三年前に計画して、強力におしすすめているケチケチ作戦だった。とうさんのたばこ代やパチンコ代まで切りつめて、郊外にマイホームを買おうというのだから、夏のレジャーなんて、今年も、とうてい望めそうにない。

（三陸の海どころか、千葉の海だって、あぶないものさ）

有には、わかっていた。

しかし、三輪房子にきかれて、みんなにみつめられているなかで、

「じつは、どこにもいけません。」

などとは、こたえられなかった。そんなみじめったらしいホントのことは、いえなかった。

「どこにいこうが、よけいなおせわだ！」

と、三輪房子や学級のみんなを相手に、大げんかする気でなきゃ、いえないことだった。

「三陸の海は、サイコウだね。」

花井有は、いすにふんぞりかえって、くりかえした。マンガ本でパタパタと顔をあおいで、へいぜんとみんなをみまわした。

（ほんとかなあ……）

という目で、みんなが有をみている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com